今日は，自治的な空間をつくるどのような可能性があるかということを，田村さんのかかれた〈プランナー論〉をきっかけにして討論していただきたいと思います

司会＝本誌編集長

田村明　横浜市企画調整室長
松下圭一　法政大学教授―政治学
大高正人　建築家
栄久庵憲司　インダストリアル・デザイナー

編集――今いろいろ都市問題が激化しているということは，われわれにとって危機的な状況として映るわけですけれども，われわれが直接タッチしている建築そのもののあり方にしても今までの建築家が閉じ込められてきた職域というようなものの中だけではこういう現実に対処していくことはできなくなっているし，それから都市計画家というようなもののあり方も，だいぶ違ってこなければいけないんじゃないかというようなこともあって，横浜を取り上げたということは，やっぱり自治体改革とその行政機構の中におけるプランナーと，そういう機構外にあってそれにいろんな形で参加していくようなことを求められている民間の建築家，プランナー，あるいはデザイナー，そういうあり方全体にかかわるようなことを，問題提起として出してみたらどうかということなんです．

それで，田村さんが書かれたことの要点から発言していただいて，それをきっかけに自由に討論していただくという形で進めたいと思うんです．

田村――プランニングとは何かということ，それからプランナーというのは一体どういう役割をするのか．　自治体の中で，プランナーというのはどういうかかわり合いを持つのか．　その場合には必ずしも個人ではなしに，組織という問題が当然起きてきます．　その中でやれたことに一体何があるのか．　そういう格好で四つほどの問題を同時に含んでいるわけです．

まずプランニングですが，簡単にいうと都市計画というふうにこの場合限定して言ってもいいと思いますが，都市計画というものがありながら都市問題というのは片方で非常に深刻になっている．　その問題というのは一体何なのか，これは計画が悪いのか，それとも現実のほうが悪いのか，それともそのへんのつながりのところが悪いのか，何か問題があるはずだと．　まずそういう問題提起をしてみたんです．

今まで都市計画という名前があっても，私の考えるようなプランニングという意味での都市計画はなかったというのが，私のこの場合の結論なんですが．

その次に，それじゃプランナーなり計画の専門家というのには一体どんなものがあったのか．戦前のいろんな歴史的な問題を言うときりがないですから，戦後の，とくに昭和30年代以降この10年か15年間に限ってみても，いくつかのタイプの人たちがあったわけです．

先ずデザイン派と言いますか，こういう人たちがいろんな活動をした時期があるわけですね．丹下さんの東京1960なんかに一つ象徴されているようなものがあるわけです．　外国なんか行くと，あの丹下の計画はできたかなんてよく聞かれて困るんですけど．（笑）　あれはぼくの言うプランニングじゃないわけですよね．　しかしああいうものがいろいろ華々しく出てきた．それを一応デザイン派と言ってるわけですね．当時は都市なんてことを言うだけで，これはもう天地を仰天するぐらいの問題だったんで，とにかく言い出したやつが全部都市についてわかっているんだというような時代だったわけですね．　だから都市計画があるなしにかかわらず都市計画という言葉はある．　すると，都市について物をつくる人が何か言い出したと．　これこそ都市計画であると．　そういう非常に単純な結合をしていた．　これは，その人たちがそう思っていたというだけじゃなしに，周りのマスコミも一応そういう格好で取り上げたわけです．　しかし，それはだんだんプランニングじゃないことがわかってきた．　しかし，それなりにいろんな意味で役割を果たしてきた．

つまり視覚的にそういう問題をクリアーに出してきたということ．　あんまり現実現実と言いだしますとものが言えなくなっちゃうんだけど，一応それを抜きにして，物の形のほうからむしろ内容に迫ってくるという格好でわりあい端的に言えてきた．　それが都市に関する考え方の，まず初めのとっかかりを提供してくれたという感じはするわけです．　その次に私は研究室派と言ってるんですが，イメージとすれば東大の都市工学科ですよ．　今のデザイン派の人たちの役割が一応あったわけですけれども，どうもデザイン派だけでは本当の都市計画じゃないらしい，もうちょっと計画というものがあるらしいということになってきて，その時代に研究室派の人たちが登場した．　この人たちは，何をやったかというと，いわゆるコンプリフェンシブ・プランニングということをやったわけですよ．　実際に取り上げたのはいくつかの町なんですが，大体今この10年間で日本の各都市というのは，なんとなくそういう研究室派的なコンプリフェンシブ・プランニングを持っているわけです．　大体それは企画部とか企画課とか，企画という名前のついたところがやっている．これが一見もっともらしくて，それぞプランニングではなかろうかというふうに思ったんだけれども，どうもやっぱりそうでない．　現実とまるっきり合ってないわけですよね．　たとえば四日市の問題なんか，四日市やってみたって，環境汚染の公害問題なんか起きると，これはどうも都市計画の問題じゃないからしょうがないとか，それから，図は書いてみたんだけれどもそれに到達する手段がない．　とにかく10年先なり何なりはこういうことなんだと．　そこへいかないのはあんたが悪いんだと．　こういうふうに言ってるわけですよ．

ところが実際にそれを受け止めた自治体のほうはわりあいまじめに受け止ってみて，これで何かやらないといけないと思ったんだけどやりようがないわけですよね．　そのやりようがないことにもいろんな理由があり，もちろん今の制度上の問題もあるわけですけれども，とにかく手がない．　だから図は書いてみたんだけれど，ああこれはもうしようがない神棚に上げとけということになっちゃった．　神棚に上がっていればまだいいんで，倉庫の隅っこのほうに入っちゃったわけですよ．

デザイン派の人たちは問題提起して，パッと山の高いところをやった．　こんどはすこし底辺的な裾野的なものを，こんなものもありますよ

というのを一応並べてみたという役割は，あるだろう．　それから，あるところの断面を取ってみて，都市なんていうのは生き物なんですから，建築と違って白地にものを書くんじゃないんで，生きてるままに動いてるわけですからね，だから，ある断面を取ってみるというのは意味があるかどうかわからないんだけれども，でも体の中でも解剖学や病理学というのもあるんですから，そういう基礎医学ですよね，そういう役割はある程度果たしたかも知れない．　だけど臨床医学では少なくともないわけですね．

そういう時代がひととおり過ぎて，それではというわけで，いよいよ臨床医学でやれる人が出てこなきゃならんだろう．　それがプランナー論になるわけです．　だから，いわばプランナー待望論ですね．　つくらざるプランナーとかよく言うけれども，あたりまえなんで，プランナーというのは物をつくる者じゃなくて，つくるのはデザイナーとか，エンジニアとかがつくるわけでね．　その意味では都市計画に作品なんてことはあり得ない．　じゃ，何なのかというとこれはペーストなんですよ．　一つのコンクリートにたとえた場合に，デザイナーとかエンジニアとかいうのは全部骨材ですよね．

しかし骨材というのはただバラバラにあったって何もコンクリートとして力を発揮しないし，ふろしきで包んでみたってどうにも使いものにならん．　やっぱりペーストがあってはじめてそれが意味が生じてくる．

そこには書かなかったんですけど，プランナーと言われているのは二とおりあって，つまり，今まで骨材がたくさんあったんだけれども，この骨材だけでは都市を溶くのにちょっと足らんと．　別な骨材をちょっと入れなきゃいかんという意味のやつも一つあるんです．　ただ，私はあんまりそれは強調する意味はないと思っているんで，その新しい骨材をつくることではなしに，ペーストをどうつくるのか．　これがプランナーの役割だろうと思っているわけなんです．　そうするとエンジニアでもデザイナーでも，それぞれが一つの全体の都市というものをつくっていくために相対的に動いていく．　それを統合して総合していくところの技術であると．

ただしかし，ペーストというのは骨材とはかかわらなくても，表面のところだけでくっついているんです．　最近接着剤なんていうのは多少中味の表面のところを溶かしまして着くという式のもありますが，プランナーもそのへんぐらいまではいくのかなあ，中味までは入らないけど，表面ぐらいのところで溶け合うぐらいのケースがあり得るんではないか，と思っているんです．

しかしペースト論というのは一応これも静態的に考えた場合で，本当はもう一つ動的に考えなきゃいかん．　プランナーというのはつまり図を書くだけじゃない．　その図に対してどう実際に動いていって実践されるかというところをやる．　実践する個々の人はいいんですがね，それを本当に動かしていくという役割にだれかいなきゃ，1枚の図がそのままデザイナーなり，あるいはエンジニアなり，ありいは普通の行政官なりに渡っても充分の意味をもたない．　それぞれの役割がちがうわけですから．　せっかくペーストで固めたものが実行の段階では解体しちゃう．　そうすると，ある時点だけじゃなしに時間的にそれを追っていかなきゃいけない．そうするとプロモーターとか，コーディネーターとか，プロデューサーとか，そういう役割が広い意味のプランナーには要求されんじゃないかと思うわけです．

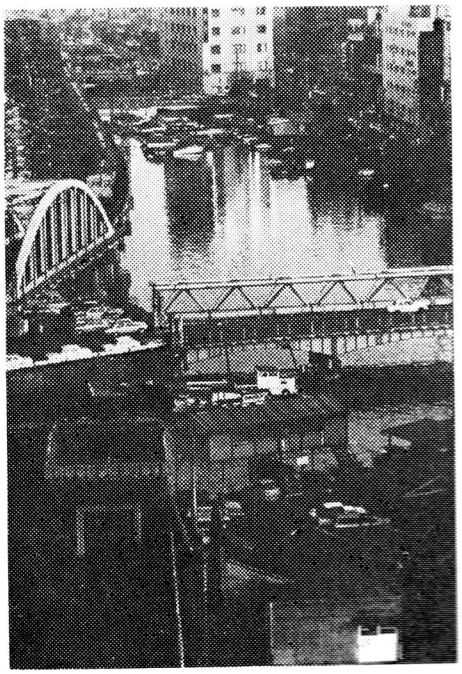
そういうことを考えると，こんどは自治体というところに入ってきます．　自治体の中では，図を書いてくれるということだけ，あるいは新しい計画を出してくれるということだけは，これは外部の方に頼んでもいいわけですね．　各自治体が全部持つなんてことはむずかしいから大いに必要だと思うんです．　ただ，それを実践的に動かしていくことを考えると，内部に今言ったプロデューサーとかプロモーターとか，コーディネーターとかいう役割を含んだ意味の実践的なプランナーというのが必要なんではなかろうかと思っているわけです．　それを自治体という場合には個人がやるだけじゃなしに，一つの組織として持つべきではないか．　それが今までの縦割的になっている行政に対して，一つの自治体として総合的に動いていく役割を果たしていくんではないか．　もちろん，法律制度を変えなきゃいかんとか，権限をどうかしろとか，財政の問題とかいろいろありますけれども，そういう話は一応別にしても，それがたとえうまくいったところで，やはり今のような組織的なプランナーというのを自治体内部で持つべきではなかろうか．

あとは，横浜でそれを実際にどうやったかという具体例になるわけです．

松下——いま田村さんの云われましたデザイン派，研究室派という流れはよくわかるわけですね．　デザイン派は，都市のイメージないしユートピアの思考実験だったという意味で戦略的に評価できる．　だが研究室派は，それと直接つながるように田村さんは言われましたけど，私は別の条件をもっていると思う．　結局所得倍増計画に適合した自治体の計画をどうつくるかという点で，自治体の政治的要求によって無責任なバラ色の計画らしい作文をつくったというだけで，日本の都市計画の歴史を長い目で見ますと，そんなに足跡は残していないんじゃないかと思う．　結果としては，自治体の計画ないし都市計画の信用を落としただけなんじゃないかという感じなんですよ．　（笑）

各都市の自治体計画を毎年集めているところがあるんですが，それを見ますと，10年後の財政の見通しだけ立ててそしてそれに応じて適当な絵を書く，それだけのことなんですね．　ですからかえって信用を落としてしまった．　そろそろ10年目がやってくるのですが，こわいですね．　ともかく日傭プランナー，御用プランナーではだめで，責任意識をもつプランナーがここで問題となる必要がある．　やはり一つは，プランナーというのは1人か複数かということですね．　この問題はどうしても残ると思うんですね．　私はやはり複数説をとりたい．　最近いわゆる学際協力とか，インターディシプリナリと言われますけれども，そういう集団思考が必要なんじゃないか．

これまでの都市計画がある意味では失敗しておったというのは，都市のトータルのイメージも



なかったけれども，実際上は工学的発想に止どまっておったからなんで，理科系の教養と社会科学系の教養というのは分裂しておって，ほとんど結びつかなかったということですね．　ですから，将来も学際的協力のくせがついたとしても私は複数だと思いますけれども，ことに今日のさしあたっての時点では，ますます複数でなければならないんじゃないか．

それぞれの市民レベル，あるいは市町村レベル，あるいは都道府県レベルで，どういうふうな形での集合体としてのプランナー組織をつくりうるかという考え方をしなくちゃならないだろうと思うんですね．

これは横の連関ですが，ついで縦の連関で考えなければならない．　国レベルのプランニングの問題ないしプランナーの問題．　それからやはり都道府県レベルのプランニングないしプランナーの問題，それから市町村レベルのプランニングないしプランナーの問題は，やはり構造が違っている，問題が違うんだということをはっきりさせないと，東京都レベルで考えている問題と，区レベルで考えている問題と，いつも話が食い違ってくるわけですね．　ですからその点をはっきりさせなければならないだろう．

そうしますと，国レベルのプランニングないし，複数のプランナーの課題というのは，国土構造ないし国民経済との関連です．　それから市町村レベルになりますと，具体的にコミュニティの絵を書くということになってくる．　都道府県ないし六大都市のところは，いわゆるリージョナルな発想になるだろうと思う．　ですから，《私の都市政策を考える》でも絵を出しておいたんですが，「武蔵野市の計画」は具体的な絵になってくるわけですね．　しかし「広場と青空の東京構想」はいわゆる構想図に止どまるわけです．　ですから，それぞれのレベルにおいて問題の性格が違ってくるんで，プランナー的志向というのはどうあるべきかという，非常にフィロソフィカルな問題は一応別としまして，具体的につめて考える場合には，やはり国レベル，それから都道府県レベル，市町村レベルに，問題をやはり分けて考えなくちゃならないんじゃないかという感じがするわけなんです．

田村――都市計画の主体というのはだれなのかということを考えてみて，今の国の問題，それから自治体の問題，それから民間の問題，そういう問題に一応触れてみたわけです．　で，いま松下さん言われたとおりに，それぞれのやっている役割の次元が違うと．　ただ，その都市計画を環境計画，特に市民生活の環境計画というふうにかなり限定して考えた場合のプランニングというのは，やっぱりかなり自治体，市民に非常に密着した都市自治体にある．　ですからそこのプランナーとして，組織プランナーと言いますか，こういうものがどうしても必要なんではないか，というむすびをしてはいるんですがね．

それからもう一つ落としたことで非常に重要なのは官庁派というやつですね．　じゃ，官庁派が何をやってきているのか．　ぼくの言うところの環境計画でありプランニングであるとは思わないんですけれども，しかしその人たちが都市計画という名前においてやってきた事実というのは，これは厳然としてあるわけなんです．

その人たちから言わせると，すべてのものを認めてないわけですよ．　デザイン派はもちろん認めてないし研究室派も認めてない．　ただ，官庁派のトップのところでは研究室派とむすびつく場合がある．　研究室派が官庁派の中を本質的にどのように動かしえたかは疑問なわけです．

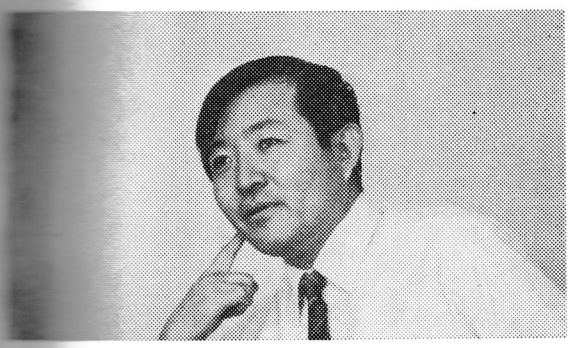
編集――そうすると都市計画というのは，実際問題としてはないと考えたほうがいいんですか．にもかかわらず都市計画の行政というのがありますね．　それがやっている都市計画というのは，じゃ何なのかということをちょっとはっきりさせてください．

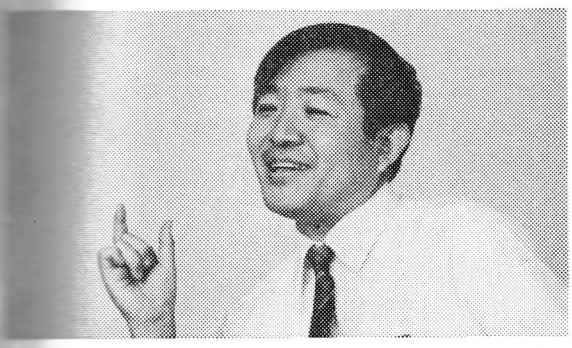
田村――何なんだと．　これを言い出すと相当たいへんなんだけれども，今までの都市計画は事業なんですよね．　それで事業に対して計画というのは，普通は計画が先行し，なおかつ事業に対してより総括性を持っているはずなんですよ．　ところが位置づけが逆なんです．　つまり事業をするために計画という手続をとらされる．　事業をする場合に都市計画決定なりそういう手続をしていることが事業遂行上便利な場合に，都市計画家という人がその事務の手続をやらされる．　だから，大体都市計画というと土木屋がやるんじゃないですかという感じなんですよ．　だから，それが全体についての総括性と先進性を持ち得るということのほうがむしろ不思議で，政府としても持ち得なかったし，やっている人もそういう意識を全然持っていない．　だから，ものにはいろいろ手続がありますから，たとえば建築を発注するんでも設計書とかなんとかいろいろ手続を書くでしょう．

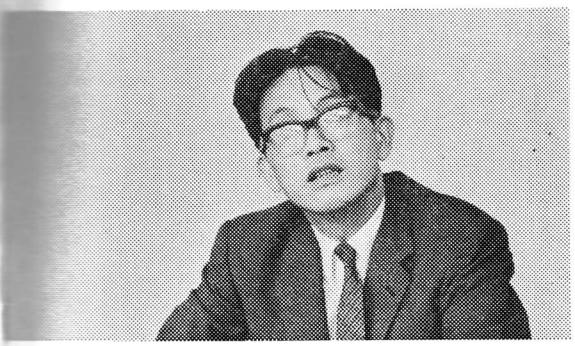
いわばあんなものなんですよね．　今までの都市計画というのを極端に言っちゃうとね．

実際にやって目に見えて，市民が接触しているのは都市計画じゃないし，都市計画事業でもない．　たとえば国鉄の問題，横浜で貨物線が問題になってくる．　あれは都市計画事業でも都市計画でもなんでもないんですよ．　ただ国鉄事業なんですよ．　ただ，あれが都市計画でないということは，素人考えでみれば不思議ですよね．　でも専門家に言わせるとあれは都市計画じゃない．　だから素人の考えている都市計画とその連中の言ってる都市計画と全然ずれがある．　とすると，片方の官庁都市計画といってるのも，どうもやっぱり都市計画じゃないと言ったほうが早そうだと．　こういうことなんですがね．

大高――さっき松下さんが，国のレベルのプランニングと，都道府県レベルのプランニング，それから市町村のレベルという話をされたんですがね，国レベルの組織というのはたいへんな縦割になっているんですね．　その縦割のプランニングの組織あるいは行政の組織が，市町村のレベルにきたときには，それを一つのものにまとめてから市民にサービスしなくちゃいけない．　そのまとめる手だてというのはほとんど不可能に近いくらい厄介だということなんですね．　それから国も，都道府県も計画や事業の内容が点と線にとまっていて面にはなかなか及んでいない．　面の部分については法律で取り締まる．　取り締まりに引っかからない範囲では何でもやりなさいというふうなことになっているわけです．







上：田村明氏　下：松下圭一氏（撮影／さとう・つねお）

それで，われわれデザインするほうも，縦には強いけれども横には弱い．　敷地がきまっていて縦に建てるのはいいんだけどとなりのこと横のことは知らんというわけですね．　そのうらみつらみがたまってデザイン派の都市計画というのが，松下さんの言うように，現実批判のユートピアになっていったといういきさつがあるわけですね．　それにしても，縦割行政は鉄壁の状況で厳存していますし，たとえば首都圏整備委員会は総合的な計画の組織ですが，各省から人を出す場合に，それぞれの省の所管を侵食しないという条件で出している．　これでは何もできるわけがない．

そういうことで，プランナーという立場の人がいるとすれば，縦割をまとめて地域の問題に網を絞るという作業をしなくちゃいけないんですね．　そういうことを自治体に定着して継続的にやっていく人がいなければ，まともなことは何もできないという感じがするんで，ぼくはそういう方をプランナーと呼んだほうがいいだろうと思っているんですよ．　縦糸と同等の権力をもった横糸がプランナーなんですね．

編集――都市計画行政というものの現状ですね．それを松下さんの政治学的な立場でもっと整理していくとどういうことになるんでしょうね．

松下――政治の実態は，国レベルで論じますとイデオロギー化されてしまうのですが末端におりますと一番この問題がはっきりするわけです．それでまず都市計画行政も各省庁の縦割支配が出てきます．　これはある程度やむを得ないと思うんです．　世の中がどんなに変わろうとある程度縦割で仕事が下りてくる．　そうしますと，やはり市民に一番密着している自治体でそれが相互に横に調整されなくちゃいかんわけですね．　ところが自治体にそういうプランニングをやり得る資質を持った人，あるいは訓練を受けた人が，ほとんどいないということなんですね．　これが大問題なわけです．

それで，自治体でみますと，大体土木関係の人はいますけれどもこれはほぼ道路づくりの事業屋さんですね．　それから建築関係もいますけれども，これは許認可事業とあとは個々の建物を建てるというだけですね．　ですから自治体の機構内部で横の調整をして責任を持ったプランニングをやり得る資質を持った人が育っていない．　たとえば私の住んでいる武蔵野市で，大体緑をどういうふうな形で保全し導入するかといった場合に，じゃ，それをどこでやるかといいますと，今までの体質ではこれは土木課だということになる．　しかし今までの土木的な感覚で緑のことをやってもらっちゃ困るわけです．　すると，こんど環境整備課ということになるんですね．　しかし環境整備課も公共衛生と，最近公害が加わった個別事業しかやっていない．　そうしますと，緑の戦略的保全・導入によって市政水準をあげる部署というものを持っていない．　こういう問題が出てくるわけです．　もし公園課とか公園部をもっていても個別行政をやっているにすぎない．　ですから，トータルに都市計画をそれぞれの自治体でやるといいましても，そういう人材あるいは部局がない，あるいは問題を提起する人がいない．

したがってさきほどの〈研究室派〉に安易に計画を高い金で委託することになる．　ここから縦割行政も貫徹しやすい．　たとえば国立の歩道橋問題はまさにそれでして，大学道路，あれをどういう性格にするかをめぐって，国立の市役所は的確な位置づけをやってなかった．　ところが縦割行政で都から歩道橋が下りてきたわけです．　これをどこにするかといえば，あの辺でよかろうということでやっちゃって大問題が出てきたわけですね．

人材の不足の問題と，それからこれとむすびつくのですが自治体が自主的な都市計画ないし実行計画を持っていない．　そこで縦割行政が下りてきますと，これを機能的にチェックできない．　そしてどんどん縦のものが下に下りてしまう．　よく市町村自治体の人は，縦割行政けしからんと言いますけれども，確かに縦割行政の問題もありますけれども，市町村の行政能力といいますものが，今の市民の要求ないし都市の現実と非常に離れた実態をなしている．　ここに非常に問題があると思うんですね．　これを変えるということになりますと，やはり日本の大学のいわゆるカリキュラムなども全部変えない限り，大量にそういう要員を供給できないという，こういう問題があるわけですね．

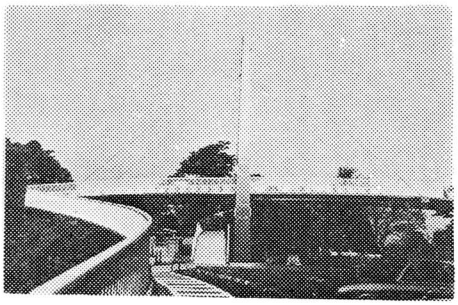
編集――そのへんの問題で田村さんのプランナー論が出てくるわけでしょう．

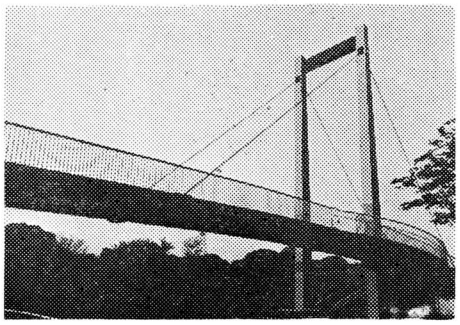
田村――そうです．　今の制度を100パーセント変えるわけにはいかないし，もし制度が変わって自治体が相当程度の権限を持ち得ても，やっぱりいるんですね．　だから，権限が現在ない，ないからプランナー組織は必要だと思うし，権限がついた場合はまた必要だという，両方が出てくるんじゃないか．　今は，ないから必要

だというほうがどっちかというと強いんですけれども．

一般的には中央の役人としては，いかにして自分たちの出先機関を自治体の中に植え付けるかという行動をとるわけです．　ぼくらが役人やったころはとくに，内務省が解体して，そのあとで各省がよりどりみどりでいかにしてわがほうに抱き込むかと盛んにやってました．　そのために大体府県レベルのコントロールを考えていた．　これは別に人事的ないみではなく，法律や補助金でそうなっている．　それからこんど自治体に入れば，まあ横浜なら横浜市役所という建物は確かにあるんだけれども，建物があってもそこに坐っているかなりの部分は，国に顔をむけている人たちが，つまりどこかの出先意識の人たちが坐っているんです．　市長ともよく話しますけれども，その人たちが〈本省〉という言葉を使うわけですね．　これはもちろん中央官庁で，中央官庁の出先である地方の局の人たちが本省と呼ぶのはあたりまえなんだけれども，自治体が何も本省と呼ぶいわれはないんですが，これは最も自然に使われている言葉なんですよ．　これでは自治体は影がうすくならざるを得ない．　だから，首長は選挙でそこに来たかも知れないけれども，そこにいる人たちというのは全部本省の，しかも各省各局各課が本省であって，その出先ですからね．　それがたまたま市役所というでかい建物を建ててその中へみんな坐っている．　だから，首長だけが自治体であると．　こういう印象が非常に強いんですね．

ですから，組織としてのプランナーというのが





出てくれば，やっぱりそれは自治体というものを本当に，首長だけじゃなしに，自治体全体のなかに広げていく，そういう役割を果たすんだろうと思いますよね．　今「出先」というのを「おまえそうじゃない」と言ったって，形式的には自治体職員ですけれども，それは法律から財政的な措置から何から全部100パーセント今変えるということはむずかしい．　ですから，それはそれとしてあったって，せっかく首長がこういうふうに選挙で選ばれても，首長だけではやっぱりどうしようもない．　だからその首長と，首長が本当に自治体として機能し得るような，そういうものが広い意味での組織としてのプランナーになってくるんじゃないか．

その意味でも，1枚の図を書くとかなんとかいうことだけじゃなしに，もうすこし日常的な，さっき私申し上げたプロモーターとしての役割とか，コーディネーターとしての役割とか，そういう狭い意味のプランナーじゃない役割が，かなり必要だという感じがするわけですね．

大高――松下さんの言われた縦割はある程度やむを得ないというのは社会組織学的にそういうものなんですかね．　たとえば農林省，建設省，運輸省などはそれぞれ組織維持本能があって，一つの仕事を3人寄って考えればいいという風には決して考えない．　Aの省が手をつけるとBは白い目で見ている．　これを下でつなぐのは至難のわざに近いですね．　私は何か組織的なあやまりを犯しているとしか思えない．

松下――日本の場合は，その縦割のセクショナリズムが非常に病的に強いということを意味するんで，これがもし国レベルでも相互調整が行なわれる，それから都道府県レベルでも相互調整が行なわれるということができたとしましても，やはり金の流れは縦割の流れにならざるを得ない．　でないと，これは国レベルでいえば内閣の各省がいらず国内省だけでよいことになる．　東京都庁でも部局はいらなくなる．　しかし日本の場合それが病的に肥大している，これはなおさなくちゃいかんけれども．　それを締めるのがやはりことに市民に密着している市町村であろうという，そういう問題なんです．

大高――その病的な度合いがもう異常な感じがするんですがね．　たとえばソビエト，中国，米国など万国共通の性格ならば止むを得ないと思いますが，一方では官僚主義を克服するというようなこともいってますし．

松下――ですからね．都市計画の今までの概念がむしろおかしいということが，はっきりすればいいと私は思うんです．　日本の都市計画は，大体土木と区画整理事業なんですね．　それからもう一つは軍事道路と産業道路．　これを都市計画と今までみなしておったわけですね．

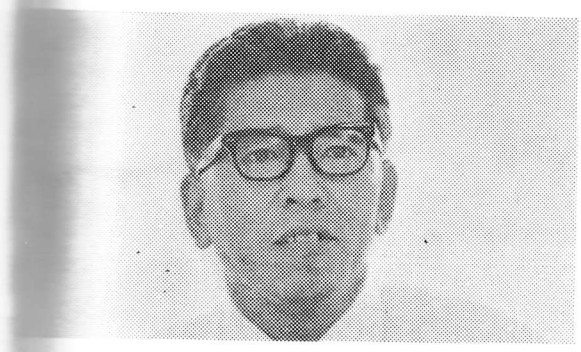
そうじゃなくして，都市計画というのは，市民の最底生活を，いわゆるシビルミニマムという規準のもとで空間的に保障していくものであるというような考え方に切り替えますと，生活全域の問題だというトータルなシステム概念になってくるわけです．

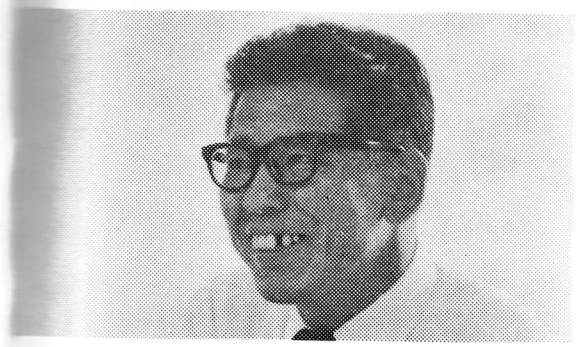
そうしますと，都市計画というのは土木課担当とかそういうことではなくして，必ず首長直属のスタッフ機構になっていくだろうと思う．

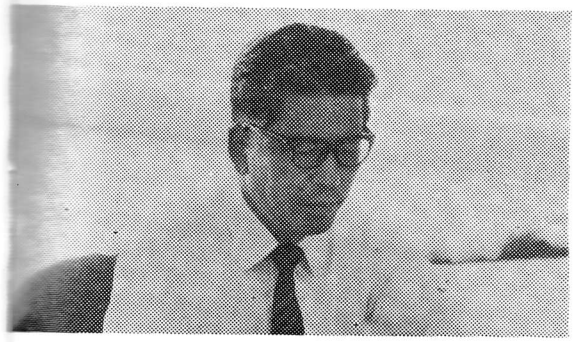
そして都市計画は自治体計画としてまず出発するようになる．　もう一つは，やはり市民そのものの生活が非常に具体的でトータルなものですから，やっぱり市民がそういうものに参加することによって，そういうセクショナリズムはおかしいということを，はっきり批判できるような参加システムをつくる．　そうしますとやはり市民参加の機構というものをどうつくっていくかという問題になる．

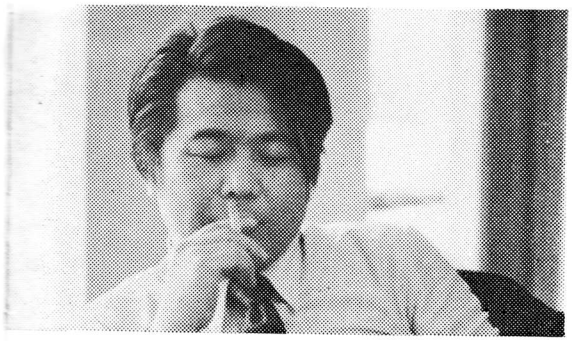
栄久庵――われわれIDデザインの立場からいきますと，経済成長で非常に沢山の物をつくったわけです．　カメラだとかトランジスターラジオだとか．　そのときにはどっちかというと通産省管轄．　これがこんど住宅問題に入り出した．　するとトレーラーハウスとか，またはプレファブリケートされた住宅などをつくってカプセル化して設置しようとする．　トレーラーハウスみたいなものだと運輸省も関係してくる．　また土地問題とかいうようなことで，さてそれを認可取るのにたいへんな大騒ぎ．　そういう面があって，さらに区へ出てきて，ストリートファニチュアのごとき，生活に非常に近い姿をとろうとすると，たとえば道にごみ箱一つ置くんでも，どこにもトータルなプロモーターというのはないということが判ってくる．

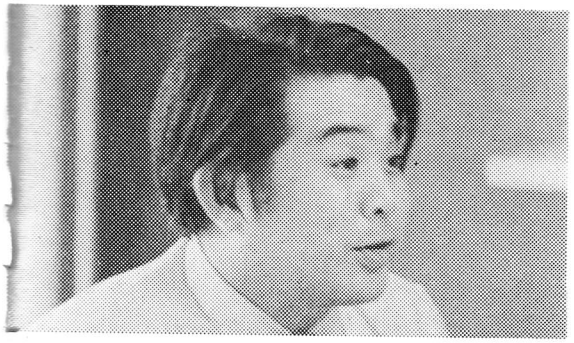
そうやってみますと，60年代までは物を一生懸命，非常に身近なところでつくって，数万，数億という品物を町へ出した．　そのように全国的パターンの中に物を流布させていったときに，先程，田村さんがいわれた骨材のようなエレメント，そういったエレメントの存在にある日突然気がついて，これじゃどうしようもないな，ということになる．　新しい物づくりが始まってきて，しかもそれが住まい空間または都市空

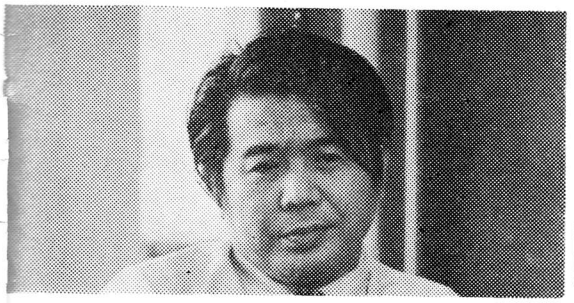












上：大高正人氏　下：栄久庵憲司氏（撮影／さとう・つねお）

間，都市環境の中に入ろうとしてくる．　それ自身一番小さな，それこそ松下さんのおっしゃったような市民レベルのものが，ある日突然目覚めるという時期がきているような感じがしますね．　そうしますと，ちょっと例はトンチンカンかと思うんですけど，お醤油と提灯というものがある．　私最近比較文化論的に考えているんですけど，お醤油というのは，料理しようと思う材料にかけるだけで全面的に日本食にしてしまう．　それから提灯というのは不思議なもので，あれをぶら下げればどこでもなんとなくお祭り的になってしまう．　それほど雰囲気をつくるものはほかにないんです．　これは何百年来のものなんですけど．　醤油というのは，小さい存在と言えるのか大きいと言ってよいのかわからないんすでけど，何かそういう非常にミクロなものが大きな生命感を持ち始めてきたと思うわけです．　こういうミクロのもののマクロな力に対して現在の行政組織はどう受け止めていくかということが，先程から出ております話の中でどう組み込まれていくかという点が問題としてあるんじゃないか．　つまり私に言わせれば，今までコンコンコチコチで一つの物をこさえていた人間が，ある反省をした．　私は人間を二つの型に分けてみているんですけど，一つはすりばちのような器の形をしたもの，もう一つは擂粉木自身．　擂鉢と擂粉木と．　そうしますと，どちらかというと私ごときいわゆる物づくり人間というのは擂粉木ですね．　今までは擂粉木人間ばかりで頑張ってきた．　しかし，擂鉢の中で何をどう和物（あえもの）にするかというところが一つの大きな問題点になってきたのではないだろうかと私は思います．

そうやってみますと，先程のプランナー論に関係してくるのですけれども，擂粉木のほうはいっぱい出てきた，今や器がほしい．　そういう面が一つあるんじゃないか．　もう一つの見方というのは，いろんな日本の文化の歴史があったと思うんですけど，戦後の経済成長で確かに60年代まではスケールの小さなものに偉大なものを発見しようとした．　たとえばトランジスターラジオ，これはベーシックパテントはアメリカからきたかも知れませんが，それに超能力を入れようとした．　またはライカからベーシックパテントを導入して，ニコンがいろんなオプションをつけて超能力を入れようとした．

つまり非常に小さなスケールのもの，これはたとえマンモスタンカーであっても同じような意味だと思うんですけど，それに超能力を入れようとした．　そういうステージから，こんどは70年代からは，大きなものづくりに入っていかなきゃならないという時期にきている．　長い間忘れてきたことが今急に求められている，そういう時点だと感じます．　日本は小さい物しかつくらなかったかというと，決してそうではない．　基本的には日本の場合には，国であろうと自治体であろうと物をつくるのが大変好きなんじゃないだろうかという気がする．　そういう現象はオリンピックにも万博にもあらわれているし，市議会でも村議会でも，すぐに議題になる．　そこで，大きなものをつくれるような諸環境というのを与えておかないと，都市生活者においても，各地方に生活されている人も，何か民族としての生きがいを失ってしまう．

そういうような意味で，先程のプランナー論にかえるわけですけど，私はやはり，非常に観念的な表現ですけど，擂粉木はできたけれども擂鉢というものがどうつくり上げられるかというのが，大事な問題じゃないかと思うんわけです．と同時に，今まで気がつかなかった，自動車であるとかそういう非常に影響力の強いものを管轄する役所が比較的各省の中でバラバラに置かれていて，各部署がそれを手離すこと自身がほかに引っかかりを生じるためになかなか手離さなかった．　ですから，豊田市などへ行きますと，都市問題を話すのがタブーになったりするんですね．　ですから私の場合には，どちらかというとミクロのほうから入っていった者の問題提起として，このミクロの力というものをどういうふうにつかむのか，これが横浜の田村さんと一緒に仕事をしまして非常に感ずるところです．

松下――伝統的な生活のパターンというのがあって，それが都市でくずれてしまった．　そして生活のイメージが微分化されてバラバラになって，しかもテレビとか自動車とかそういう個々の物に一応還元された．　それさえ蓄積すれば生活はよくなると思っておった．　ところがもはや違ってきた，もう一度バラバラになったものを積分するとか，システム化しなければならない．　そういう段階になってきている．

自治体行政を見ても，そういう問題がたくさんあると思う．　過疎地域の問題は一応また別にして，こういう問題なんですね，人口がどんどん増えていくところは，最初の段階ではその人口増に追いかけられた仕事で手いっぱいで，と

にかくプレハブでもいいから学校をつくるとか，あるいはスプロールにつれて清掃区域を増やすとか，それから排水溝をつなげていくとか，そういうバラバラな仕事に追っかけられてくるわけですね．　市民要求もバラバラに出てくるわけです．　とにかく電気洗濯機を買ったけれども水道がないとか，そういうものに大体追っかけられている仕事というのが，これまでの都市化区域の行政の実態だったわけですね．　だからある意味では縦割でやってこれた．　市民要求もそういうものだった．

ところが，今二番目の段階に入っているんじゃないか．　二番目の段階は膨大に金を食う．

自治体の宝としての学校を鉄筋化してちゃんとつくりなおすということですね．　学校というのは自治体の最大の財産なんです．　それからもう一つは下水道です．　これも相当金を食う．これが大体二段階になると思うんですね．

それから第三段階になってはじめて緑をどうするとか，それから再開発をどうするとかいうので，トータルな都市計画がぼくは日程に上るんだろうと思うんですね．

ですから，今までの自治体行政というのはまだ第一段階で追われてきたといえる．　しかし実際上は論理的にはこれは逆転してなくちゃいかんわけなんです．　トータルな都市計画がまずあって，そして市民にとっても自治体にとっても宝ものの学校，それから下水道を整備する．それからそれに対応して個々の細かい行政をやる．　それが逆転しておった．

大高――確かに今再開発をどんどん進めてますが，あれもたいへんな金を食う仕事なんですね．一体これから都市というものをどうつくって，その中にわれわれがどう住んでいくべきかというような問題を，わりあいさらっと流して部分的に再開発をやっているんですけれども，あれはまたもう一回破産しますね．　あの金はもったいないと思うんですがね．　どうもそういう都市の中にわれわれがどう住むかという基本的な問題はまだしばらく先で，ぼくらが死ぬころまでにはつまらん再開発を相当やらされそうだという感じが強いんですがね．　（笑）

どこかで早めに公害問題かなんかに引っかけて，もう一度都市というものを，行政のレベルでもそうだし，専門家のレベルでも，市民のレベルでも考えたほうがいいように思いますね．　宇部市の場合は，奥さんがたの中のアクティブな人たちがそういうことを考え始めてきたところにどうも一番大きなポイントがあって，行政がそれに合わせていろんな手を打ってきたのが，宇部市の緑の成功した基本になっていると思うんですね．

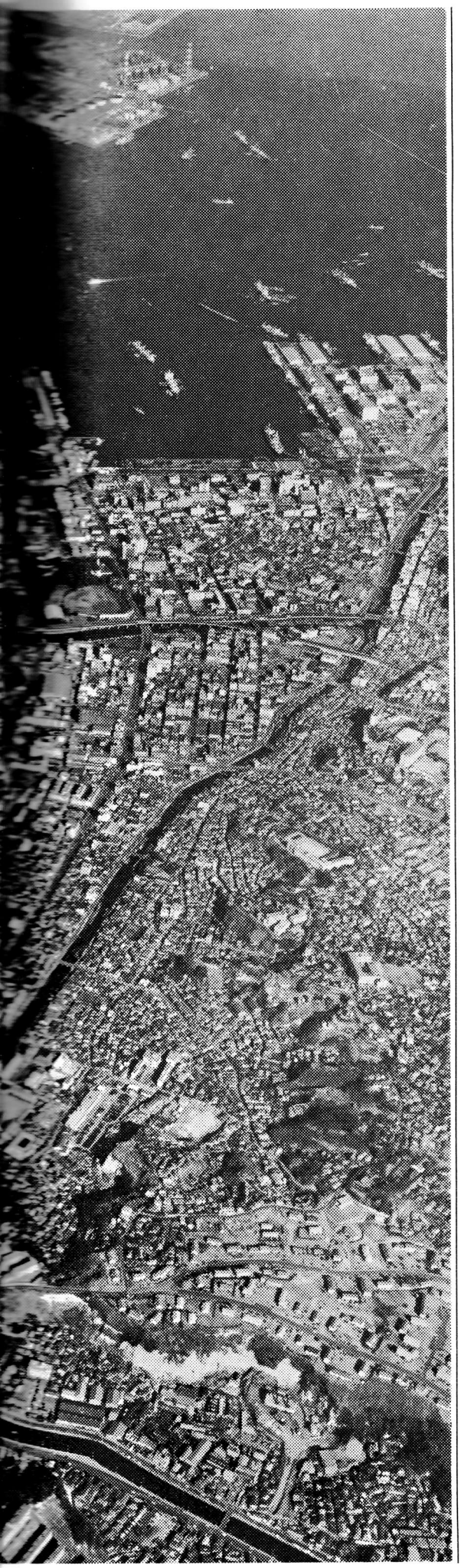
栄久庵――私も最近ロサンゼルスから帰ったんですけど，ロスではよく東京の話が出てくるんです．　今日は横浜の話ですが，問題は似たようなものです．　東京はエキサイティング・シティである，しかし住むには不適当だというような二つの評価をむこうでは出すんですね．

ですからそういう点で，たまたまジャンボが木更津のほうから降りてきますと，各ダウンタウンが見えるわけですよ．　ほかの国ですとそんなにダウンタウンというのはたくさんはないわけですね．　ところがあっちにもこっちにもあるというわけですね．　池袋があったり，渋谷があったり，あっちに光がポー，こっちに光がポーとしている．　すると，さあ東京というのはすごいエキサイティング・シティだと．　一つの問題としては，市民的レベルからみて，たとえば明治神宮のような森があるのがエキサイティングなのか，または，池袋とか新宿とかいうものがエキサイティングなのかというような，いろいろな疑問が出てくる．　何か都市の中で，これは先程言われていたデザイン派に入るかも知れませんけどね，そういうようなものがどうこれから置き去りにされるのかされないのか．放っておいてもそれは生まれていくものなのか．たとえば，私も自分自身の中では，横浜の地下鉄のサインとか，ストリートファニチュアを計画したわけですけど，地下鉄がエキサイティングなのかどうか．　それはコンビーニエンスというものから，エキサイティングのほうに切り替われるかどうかということを，自分自身のプロジェクトの問題としは，持っているわけです．

大高――話がとぶかも知れませんが，都市には建築がたくさん建ってますけれども，それぞれの建築で直接関係があるものは数がしれているんですね．　住宅もたくさんありますが，私の家と，たまに訪ねる友人住宅ぐらいですね．

そう考えると，今まで建築の外側の部分がむしろわれわれに一番関係のあるインテリアで，ほとんどの住宅とかオフィスというのは，私にとってはエクステリアであるという感じがするんですね．

ところが建築造る人も市民もはそうは考えない．マイホームの中だけが自分に関係あるんだというふうにしか考えない．　どうもいつのまにか



横浜市中心市街地（写真提供／横浜市）

逆転して考えていたような気がしてしょうがないんですがね．　行政の問題なのか，習慣の問題なのか．

われわれにとって一番関係の深いインテリアである都市空間について，考えたり仕事したりする人はほとんどいなくて，みんな「たにし」のように殻にとじこもって目をむいている．

松下――たとえばヨーロッパの場合には，石からセメントになっていくというのはそんなに違和感はなかったんだろうと思うんですね，美意識からいっても．　ところが日本の場合にはたいへんな違和感です．　そこでトータルな市民的な美の共通意識と言いますか，コンセンサスができにくい．　だからヨーロッパのアムステルダムとかではペンキの色まで指定できるというような，ああいうコンセンサスは，今のところ日本では非常に無理だろう．　それからいま出されたエキサイティングの問題でも，日本人が今高度成長で発狂しているからそうなのか，それとも，都市が都市らしい形を持ってくるのは幕藩体制ぐらいからですけどね，そのころから日本の都市はそういうある程度エキサイティングしておった要素を持っていて，日本のカルチュアな特質を持つのかどうかですね．　これは大問題で，しばらくは回答は出ない問題だろうと私は思います．

栄久庵――実感ですけど，簡単に言って広い道と住まいが欲しいと思いますね．　前に未来学会のレセプションで，国際会議場でフランスの婦人でしたが，「日本の人はずいぶん狭い家に住んでいるんですね」と言うんです．　そのときに答えられなくてね「うん，それは狭く見えますけど，まあ入ってごらんなさい，みごとですよ」と言いたかったけど，言えないというつらさですね．

松下――ただ，家と道路というそれは，よくわかるんですけど，むしろ私は都市計画といった場合に，これはメタボリズムのみなさんにお教えいただいたんですが，青写真でピタリといきえないのではないか，東京都の道路問題がいきづまってきたというのはまさにその問題なんですね．　官庁の上のほうで地図の上に線引いて実際あたってみたら，学校の校舎のどまん中が四ツ辻になるとか，そういう問題が今どんどん出てきているんです．　この間都でストップした三つの都市計画事業，あればかりじゃないんですね．　ですから，そういう都市計画ではなくして，もっとソフトな都市計画を考えなくちゃいかんのじゃないかという感じなんです．

私たちが武蔵野市でやったこんどの長期計画は決めてないわけです．　武蔵野市の方向を出しまして，あとはいわゆる緑化委員会だとか，市民施設のプロジェクトチームとか，10カ年の中で市民参加のそういう組織でもってそこで中身を詰めていくというやり方です．　そういうソフトな計画にしてあるわけですね．　官庁的に，これこれこれを全部10カ年でつくるんだという一覧表を作らない．　一覧表を作文してもらって，市民もよろこぶし，市長も選挙に役に立つという，ああいう今までのペーパープランの作り方，あれ自体をやはり批判しなくちゃならない．

田村――松下さんは定量論者だと思ったら，そうでもなくなったんですか．（笑）

松下――いや，ただシビル・ミニマムという最底基準は定量的にすることは主張していますが，それを具体的に都市空間化してどこへどのように配置するとかは，市民参加で長い過程で決めていくべきだという考え方なんです．

田村――われわれがマスタープログラムであるというふうな言い方をしているのは，多少それに近い考え方なんじゃないかと思うんです．

さっき栄久庵さんが言ってた道と家というのね，確かに単純だけれどもね，プランニングでやっていることはけっきょくそういうことだと思うんです．　ただ，道路と言ったんだけれども，ぼくはもうすこし広く社会空間というものの中に道路もあるということだろうと思うんです．

栄久庵――そういうことですね．

田村――今までの市民運動で要求が一番強いのは，個人空間なんですよ．　それはむしろ防衛の思想ですよね．

ところが社会空間のほうは，相当いいかげんになっていてもあまり言わないわけですよ．

それが自分の個人空間に影響が出たときにはじめてものを言うだけで，積極的に社会空間をつくっていくべきであるとか，これを拡大していくべきであるという方向では，まだ今のところは出てこない．

しかし，結局のところは，個人空間を守ることも，社会空間の，しかも良質なものが確保されない限り，個人空間自体が維持されないんだと．そういうことはぼくは今の問題で，最近はわかりかけてきているんじゃないか．　ただわかりかけているだけでどうもそこまでしかない，つくるんだというほうにならない．　しかし守り

はつくるでね，守りだけでいって決して守れないというのが今の日本の都市問題じゃないか．それが，大高さんの言われた外部空間論なんかにも非常に近いんですが，そういう意味でエクステリアと言ってるところが，ぼくの言ってる社会空間というのが，まさにその都市にとっての内部空間であるというか，都市空間そのものである．

ところが，個人の所有権というのが出てきたときに，私的なものと公共的なものがはっきり分離されて，公共というのは自分たちのつくった私的世界に対しては完全に外側になるんですね．私有権が内側であってあとは外側なんだと．

そういう所有権に対する基本的な考え方，公共に対する基本的考え方が，さっき大高さんが言われた，空間的に見ればそういう状態を示している．　ただ，ヨーロッパの場合には，そうは言うものの，割切ったようで何かそこにもう一ぺん集まってみんなクラブみたいにこれを保持するとか，多少そいつが残っているんだけれども，日本の場合にはばっさり切れちゃったと．

戦争中に，標語でよく言われる「公共と思う心がすでに敵」でしたか，公共というのはもう何してもいいと言う意味なんですからね．　あるいは逆に，公共というのは自分たちにとっては単なる権力であると．　逆にそういうふうに向いてくることもあれば，自分たちが何を掃き捨ててもいいと．　だからやっぱりその公共空間——公共という言葉はいやらしくて，社会空間という言い方をぼくは最近してるんですが——をもう一ぺんどうつくっていくかということがかなり問題じゃないか．

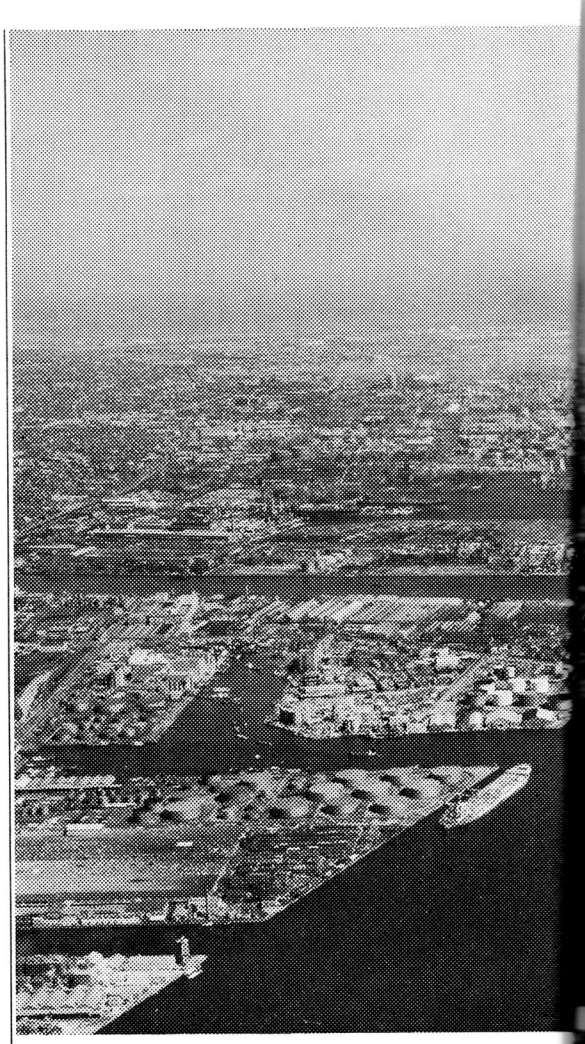
だから，デザイナーの人たちのそういうところでの仕事というのは，すごくあると．　その社会空間というのはもちろん制度的，量的にも確保しなきゃいかんけれども，やっぱりいいものでなきゃね．　その中では，ぼくはそういう都市に関心のあるデザイナーの人たちと，たとえば地下鉄のデザイン委員会を作ってみる．　地下鉄も社会空間の一つですけど，あれは空間的には厳密に技術的にきまってくる．　それを量的にふやしてゆくという話はあるでしょうけど，質的によくなるかならないかというところで，さっきのお醤油，あるいは提灯といいますか，そういう役割がぼくは非常に効いてくると思うんです．　だから，さっきのコンプリフェンシブ・プランナーが，あんがいそういう本当の都市の，庶民にとって手でさわれる触覚のあるそういう感じてふれてこない．　だけどやっぱり本当に今つくるんだったら，そんな抽象的な10年先の図を書いてみるだけじゃなしに，今の町をどうつくってくるかというのに相当関心を持たなけりゃ，いくら積み上がったって20年先にいいやつになりっこない．　そのためには今の醤油のかけ方が非常にぼくは重要だと．　それについてプランナーが，いやそれは誰かがやるでしょうと言ってるんじゃやっぱり困る．　その意味で横浜市の中では，地下鉄は確かに事業屋さんのほうがああいう形でどんどんやっちゃう．　しかしそれだけじゃ足らないんで，うまく醤油をかけなきゃいかんというんで交通局の中でデザイン委員会をこしらえてみて，栄久庵さん，栗津さん，柳さんに入ってもらっている．

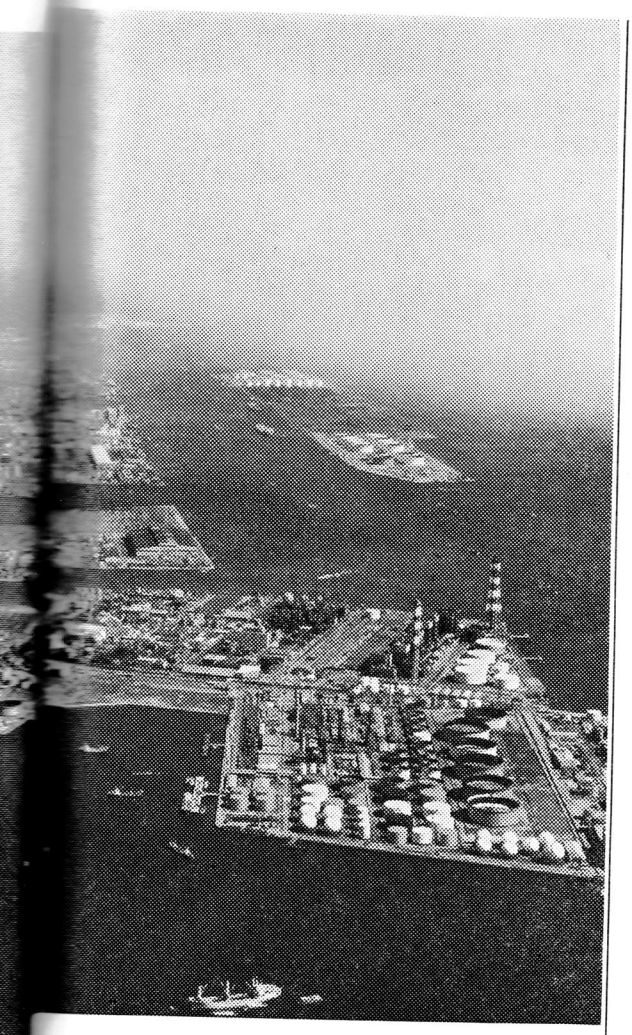
栄久庵——それはめくらヘビじゃなくて，やはり一つの調整機関というんですか，プランニング機関というのがあって，それに一つの期待と夢があれば，骨材屋というのは比較的単純ですからね，気っぷというのがありますからね．

大高——いま学校をつくる場合でも，行政関係の人は，予算を1割増やせばよくなるだろうというような予算操作的な感覚が非常に強いですね．　価格がそのまま価値になるというわけにいかないんで，金が本当にその地域の市民の人たちに理解される形で定着しないと意味ないですね．　建築屋の場合は，ちょっとまとめればそれでもう済んだというけしからん骨材屋もだいぶあるんで，そういうことを行政レベルの人が知らないから一寸おせじがうまいともう仕事をお願いしますということになる．

田村——それで困っちゃうんです．　大高さんのよくご承知の，われわれ分区というのをやって，これは一つの市民サービスというところからいったやつでね．　分区の話はおいて，区役所をたくさんつくらなきゃいかんということが出てくると．　これは物になっちゃうわけですよね．　しかし，ただ分区したとかなんとか抽象的なものでなしに，最後にできる建築物，区役所というのは，やっぱり市民にとってすごく意味があるしね．　これ一ぺんつくっちゃったものはまず変わらないわけですよね．　分区なんてまた何年かたってできるかも知れないけど，建築のほうはなかなか変わらない．

本当にその区役所建築というのは何なんだと問うてみたことがあるかというと，あまりないわけですね．　とにかく箱つくればいいと．　箱つくれば中に適当なスペースがあって，1人当





京浜工業地帯　上：鶴見付近　下：子安付近（写真提供／横浜市）

たり何平米かでそれを掛けてやると予算が出るという式でわれわれ予算査定してるわけですよ．それはもちろんそういう段階を経なきゃどうにもならんでしょうけど，やっぱりできているものがえらく違うわけなんだから，そこをやっぱり本当にやってみるべきじゃないかと．　こういうことを提案したんですが，なかなかこれが役所の中では，とにかく箱ができるのがたいへんなんだから，田村さんそう言ったって，という話なんですよ．　そうは言うけど考えてみようじゃないかということで，槇さんと大高さんにお願いしようとしたわけですが，実際にそのうちの槇さんのは金沢区役所という格好で出ました．　それは広場も中へとり込んでおもしろい建築なんですが，やっぱりできてみるとね，この前うちの市会議員がこの区役所の視察をして，あれはいいという評価をもらってます．やっぱりつくって見せてやるとわかるんですよ．

栄久庵――それは一つのエポックみたいなサンプルですが，サンプルが非常にブローしていくというやり方が一つあるんじゃないか．　もう一つは，全国に家政科があるわけですが，それがもうだめだと．　つまり電気釜のお作法なんていうのはだれも教えないわけですよ．　それからタライで洗濯するという教授法ではどうしようもなくなってきた．　たとえばディスポーザーが欲しいとか，あるいは電気洗濯機と湯沸器で生活を組みたてていく．　そうしますと次の家政科の人たちはそれを教えるときにどうするか，ディスポーザーの排水は下水に流れて，そしてどこかで処理されなければ使えない．そうするとそれはあるか．　ない．　そこで家政は，家と政治とがつながった学になる．　家の中でつかわれていくそういう道具類というものが，かつては家の中だけで自己完結していたのがだんだん世の中につながっていき始めた．そういうところから自然に町の人が集まって，下水も私道的下水でひどいということになり，それで町が集まって何とかしようということになる．　家の中でそういうものができ始めてきた．そういう力がだんだん表に出ようとしているところに，一つのものが発達していく，それをサポートする力が求められてくる．　それからまた，生活の味わいというのが問題になってくる．その味わいのよさというのをどうしてもサポートしてほしいということを要求されていく．と同時に，もう一つは非常にバランスが悪くなってきた．　たとえば非常な便利さはあっても，他のものとのバランスが非常に悪くなって，頭だけは先へいってるけど実際はそれをサポートできないという，ちぐはぐなところが生まれてきている．　それで最近東芝の例ですけど，非常にみごとなクーラーができたんですね．　それはちょうどステレオみたいな格好していて水をこういうプラスチックスの中に入れる．水冷式なんです．　こんな小さな穴だけポッと出しておけば部屋が冷えちゃうんですね．　つまり石油コンロの逆です．　そういう知恵がこんどは中ででき始めてきた．

つまり，私が非常に心配していることは，たとえばメーカーとそれから，カストマーズの世界に，断絶ができて，それから私的な世界と公共との間に断絶ができて，おれはおれでやってしまうんだというような格好で，それなりに解決しちゃうわけです．　そういうあたりでサーッと小さく解決篇に入っちゃっている．　そうしますと，非常にいま話されている大きなつながりをなんとかしようと思いながらも，部分的な解決が先行してどんどんされていってしまうと，これまた一つの問題が含まれていくのではないか．　ますます，大きな亀裂ができていくのではないかという心配があります．

田村――小さいという意味が問題なんだけれども，そのセルフエイド系というのが都市の中にも入ってこないと，どうしょうもないんじゃないかという感じがしているんです．　今のがそれになるかどうかわからないんですけれども，特に廃棄物処理体系なんていうのはぼくはかなりそういうものが必要だと．　ある程度の段階でね．　その次の段階でどうしてもしょうがないものが出る．　その中でまた片をつける．どうしょうもないのがいくという格好がなくてとにかく大量処理というのはいいことだ，大量処理は能率的だと，だから突込んじゃえというような格好でやると，たとえば東京都で問題の浮間下水処理場，工業用水の排水処理場ね，それで一発やって全部処理してやるんだなんていうことでやったんですけれども，なんでもかんでも一緒に入れちゃったもんだから水質がめちゃくちゃで，全然処理能力に合ってないわけで，そうするとやっぱり本来は，メッキ工場ならメッキ工場で自分でしなければいけなかったことをしないで，大量はいいことだ，公共的にやればいいことだということでやったんだけど，うまくいかないということもあるわけですよね．だから断絶では困るんだけれども，システム的

にセルフエイドのシステムができていくことが，ぼくは必要なんじゃないかという感じがしてますがね．

栄久庵——そこらへんに一つの村だとか町をつくっていくときの，いい言葉がほしいということもあるわけです．　つまり，うらみつらみを言ってる気持がはっきりあらわせる言葉ですね．便利になれば結構だと思う瞬間から，そのセルフエイド系といったものだけがどんどんできてしまうと，一体どういうふうに発展をしていくだろうかというような心配が生じる．

大高——しかし，そういう個人の範囲内で解決することのパターンもまだできてないんですね．たとえば田舎へ行きまして，昔は泳げた川が今は泳げなくなっている．　それもどうかというと，コーラーのビンだとか，ビニールの袋とか，ああいうものも田舎でもどんどん使うんですが，それをみんな川へ捨てちゃうんですね．　公共的な部分にね．　だれかが来て掃除してくれるだろうというわけです．　それを見てますと，捨てる部分では，だれかがなんとか，するだろうということで，個人的に解決するセンスがない．　役場のほうも川じゃ流れるまで放っておくよりしょうがないということで，だんだん子供の泳ぎ場がなくなる．　個人的にコントロールする部分も何とかして増やさないと，これはどうしようもないですね．

松下——そういう意味では，単に調整するだけではなく，生活にとって必需的な問題領域の情報が蓄積されているか，という問題が残ると思う．　これがほとんど未開拓だということなんですね．　そういう意味で家政学がいいほうに転換してくれれば，一種の生活科学ないし都市科学になって，生活システムを具体的に考えうるミクロな情報を的確に提供してくれることが必要です．

それからもう一つは，今の話ともからむわけですが，じゃ個人的に個人セクターで解決していくのか，それとも社会的なスケールで解決するのかという問題ですね．　たとえば地震になったら石油ストーブはどうするか．　ソビエトでは地域暖房でスパッと割切っちゃいまして，個人の家にストーブがあること自体がおかしいというふうになるわけですね．　それから最近では台所用の浄水装置を売り出したものですから，公共的にはどんなインチキな水を流してもいいというようにね．（笑）　すると，やはりマクロのフィロソフィーも持たなければならない．

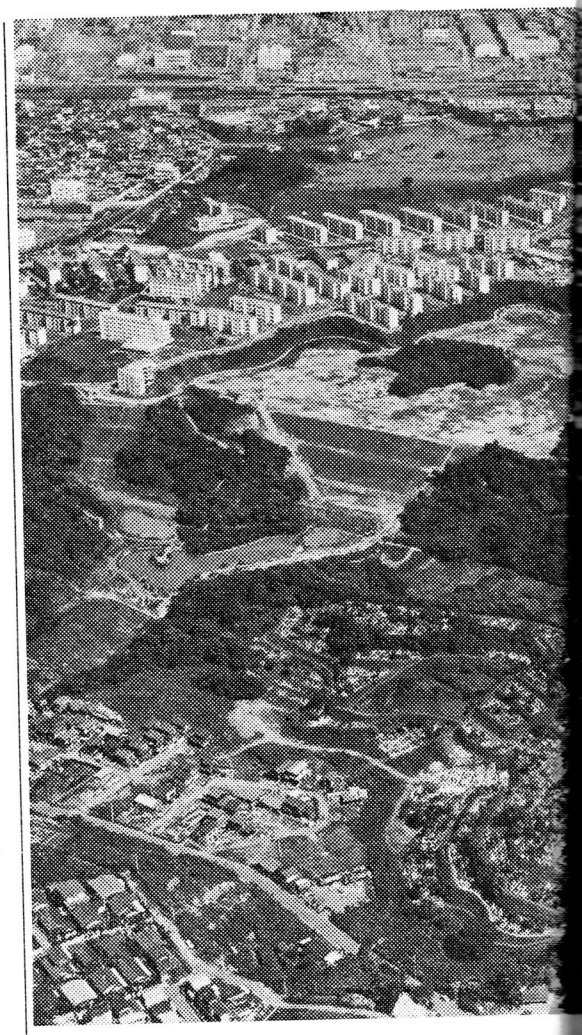
田村——だから横浜で企画調整室ができましてから，役所の人たちはそういうある調整の必要は感じてきているんですよ．　ところが，その調整なるものが何かというと，二つあるものを足して二で割れと．　三つあれば三つ平均するのが調整だという感じをまだ持っているんです．だけど実はそうじゃなしに，都市の環境として本当に必要なものがあって，それを今までのゆきがかりや日常性を考慮しつつもさらに本質的に考えてみる，それに三つのものがもし方向がずれているとすれば，急に変えるわけにはいかないけど，すこしずつでも軌道修正してそこにどう乗せていくかということが調整であって，はじめから三つあるから足して割るなら，何も調整機能なんていらないんですよ．　そこで3人で話し合えば適当な解決が出るわけなんです．

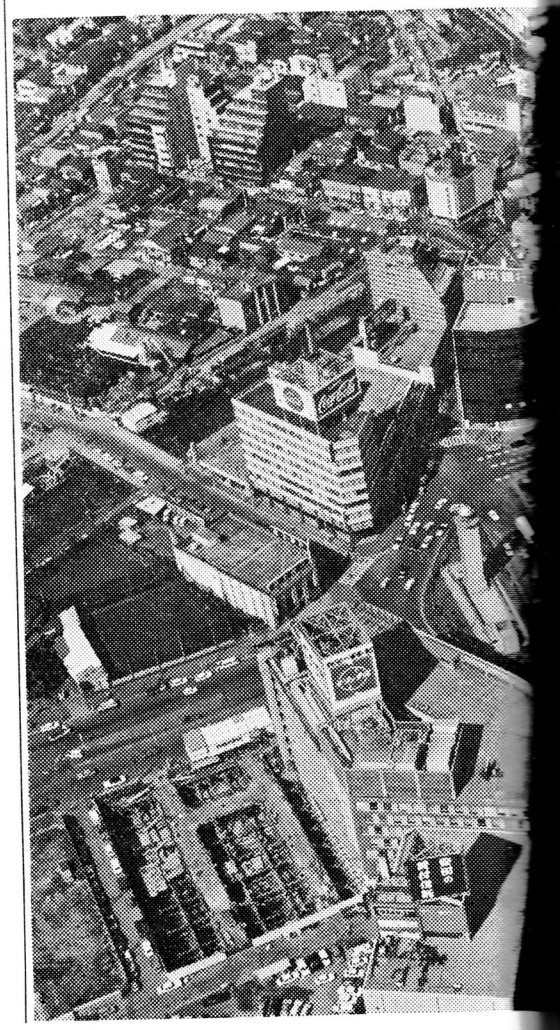
大高——それは全くその通りだ．　東京都もその調整では決してうまくいっていると思えない．多摩ニュータウンでも首都整備局と多摩開発局と住宅局が同床異夢でこれはどうしようもない．

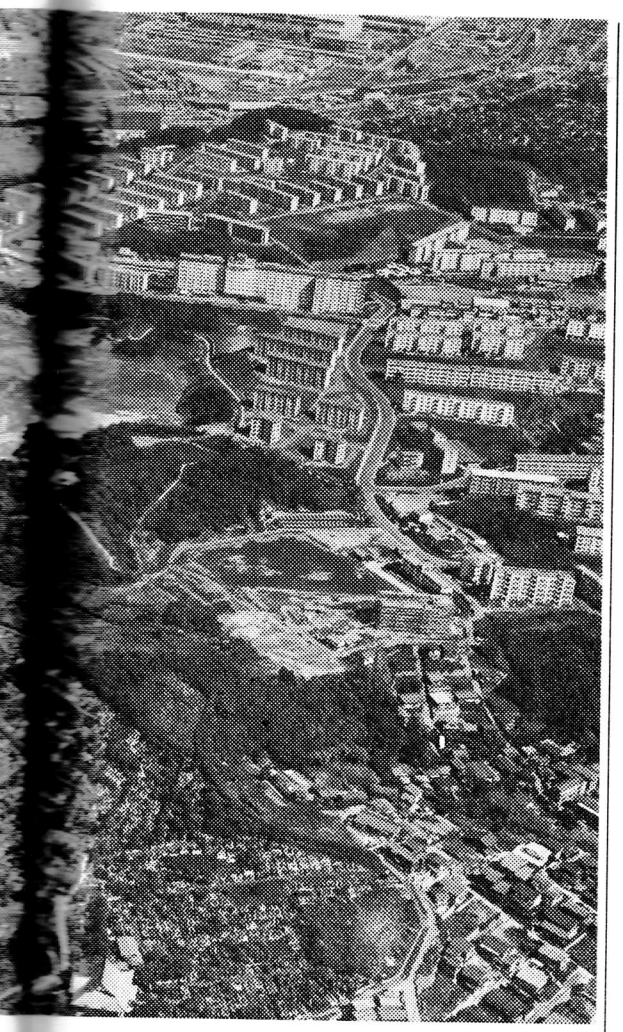
松下——どうしょうもないと言ってもしょうがないから，やっぱり権限を市町村に下ろすべきだと思うんです．　横浜などの大きな都市は，一種の特別市制度にして，今の行政区には普通の自治体の権限を持たせる．　東京都の23区ももう市にしちゃって，それも今の区は県並みの人口ですからあれを三つ四つに割る．　そうしてそれぞれの自治体がそれぞれ独創的ないい仕事をすればいいと思うんです．　しかも波及効果を及ぼしながらお互いに真似し合っていく．官僚の悪口ばかり言っておってもこれはどうしようもない．（笑）

大高——しかし企画調整室というのも実施の部局までタッチできるだけの，首長の思想を入れて表現できるだけの力を持たないとまずいですね．

田村——だけど，また横浜みたいに今の大高さんのおっしゃるところまでやっている企画調整部門というのは，全国の自治体ではないですよ．たとえば歩道橋のデザイン一つにしても，あんなくだらない歩道橋じゃだめだと．　それで柳さん呼んで来てデザインしてみると，やっぱりみんなよろこんでいるんです．　本当はそんなそれは都市計画じゃないし，そういうものはいわゆるコンプリフェンシブ・プランニングの仕事と思ってないんですよ．　だけど私はやっぱりそこまでが，プランナーの仕事だと思っているんですよ．







上：磯子　汐見台団地　下：横浜駅西口（写真提供／横浜市）

大高――それとね，市民革命をやはりやらんといかんですね．　政治への参加の作法からポリバケツの始末の仕方とかまで．

田村――そう．　ただ，ぼくらがやってみて，既成観念が固定化しているところでは，とくに新しい問題にとりくむところ，企画調整的な機能というのは必要だと思っている．　たとえば廃棄物の問題なんか清掃にとっては大問題で死活問題．　そういうところは孤立無縁なわけでしょう．　それから，たとえば農政局を緑政局に変えましたけど，ああいうところ，農政なんかいまつぶされるかと自分たちで本当にその中で悩んで，何に一体新しい価値を見出していくかということを悩んでいるでしょう．　そういうところとは一緒に新しい方法を考えてゆくことになる．

大高――飛鳥田市政の窓口になるような場所を3カ月でやれとはなにごとだというのでことわっちゃったんですが，横浜市は早くから市民参加ということをいっている．　しかし市民参加といっても利害が相反する場合もあり，実態は全く複雑なものなんですね．　私は港北区の農民を環境建設に参加してもらう緑農住区計画というのを現在やっておりますが市民革命がないと成り立たないような場面が多いですね．

お上の縦割をまとめる仕事に加えて市民の心を育てその心をすくい上げていく仕事というのはプランナーの仕事としてあり得るんですかね．

田村――その前に，中央・地方の問題もやっぱりすこしは変わりつつあると思っているんです．だから，いずれにしても旧い部分というのはあって，新しい部分は中央は中央なりに，もうちょっとうまくやらなきゃいけないという感じになってきている．　そのうまくというのは，なぜうまくなのかと言うと，いま大高さんの言われたことに関係あるんだけれども，住民パワーというのはいろんな意味で出てきてね，今までは中央でなんとなくエイッとばかり命令一下といった感じなんだけれども，そうはいかないという実感が出てきたわけです．

そうすると，中央官僚というのは本能的にうまくやることが上手なんでね．　だから，そうなって今までのやり方がうまくないとすると，もっとほかのやり方があるじゃないかと．　それには自治体なり何なりにもうちょっと押しつけて，うまくいけば半分向こうに責任負わせたほうが，おれたちとしてはあんまり無理なことしないでうまくいくんではないかという感じがすこし出ているんですよ．　だからそれが間接的にぼくは今の中央・地方のところで別な意味で機能してきて，もうちょっとうまく分かれてくる．　そのかわりに変なとこから責任ばっかり負わせられちゃって，こんどいいところは国に吸われちゃうなんて逆の面も出てはきてますけど，いずれにせよ，全部おれたちがやっているんじゃこれはとてもじゃないと．　自治体というのは相当何かやっとるらしいし，だいぶ「SD」などにも書いてあるから（笑），これはそういうところにやらせているほうが私たちも気が楽だという感じになってきましたね．　旧い体質の人はしかしそんなこと言ったっておれはおれだと思ってるから，旧い体質は中央・自治体を含めてどっちもだめなんで，新しい体質の人はどっちもすこし変わってきたんじゃないですか．

大高――田村さんの話しで，少しづつ変ってきていることは分るんですが，私は市民と一口にいわれるものの内容が気になるんです．　横浜市の外周地域も，ここ僅か10年の間に伝統的な農民意識に，全く自由ほうだいの戦後の市民意識が混在してわけが分らなくなっている．　市民のエネルギーの方向をこのまま放置してどうもいい結果は得られそうもない．

松下――さしあたって新開地に急激に入ってきたところは今お話のような問題があるんですが，10年たちますと案外変わってくる．　地域の問題というのは大体共通性がありますから，古くから住んでいる人と新しく住み始めた人との間に，団地型じゃない限り，案外コミュニケーションが始まる．

ただ問題なのはね，こういうことだと思うんですね．　横浜などの場合には直接民主々義を最初に大胆に打ち立てられたから，それは当然のことだというふうに考えているんですが，普通の市町村の市長さんだとか職員の方は，市民の前に出るのは非常にこわい．　こわいというのは，仕事がマンネリだから市民から批判されるのがこわいという面もありますが，やはり市民のほうも相当問題を考えずに，ただワーワー言う場合もある．　だから，一定のルールのもとで対話ができるようにするということが必要になってくる．　そのためには市がやっていることの情報をどんどん市民に提供しなくちゃいかんわけですよ．　何も，提供しないものだから，何かおかしなことをやっているんじゃないかというような目でしか見ていないというようなこ

ともあります．　だからやはり情報を公開する．他方市民の教育水準が非常に高くなってきている．　若い層ではもう大学進学率が25%近くになってきているんですからね．　そうしますともう10年たちますとたいへんなものになります．それから高校進学率90%です．　しかし水準は高くなっても自分の住んでる自治体のことはあんまり知らないわけです．　だからそういう人たちがいろんなチャンスで参加することによって情報をえていく．　そうしますと，わが市はこういう問題で悩んでいるんだな，ということで，だんだん接触チャンスが増えれば増えるほど，自分たちの自治体について考えるチャンスができてくる．　にもかかわらず自治体は，中央の偉い人を呼ぶ．　意見を聞く場合に地元に住んでいる人たちを呼ばないんですよ．　中央の偉い人というのは，新全総にかんでる人などです．　だから中央的な発想が都道府県の計画にそのまま入っちゃう．　それから市町村にも呼ばれるからそこにそのまま入るわけです．
これはまさに，住民不在の自治体です．　先程のペーパープランになってしまうという問題がここから出てくる．　そういう意味では市民の中の専門家をどんどん使っていく．　事実この間東京で7月31日に市民運動連合の自主討論会をやりましたが，議論の水準は非常に高い．
そういう市民と自治体との情報ないし接触を通ずる循環構造をどうつくるか，これがまたプランナーの一つの大きな課題じゃないかと思うんです．

大高――市民意識が松下さんのいわれるように高くなりつつあるとすれば先程の区役所ですがね，市民と，役所の人がもうすこしゆったり話し合える場所につくらなければなりませんね．一般には行政的な事務所をいそいでつくっちゃうんですね．

松下――そこが問題なんですよ．　とにかく予算が単年度でしょう．　で，数ヵ月でやれと．住民の意見聞いておったら間に合わないと．いう言い方するわけですよ．　それはあたりまえなんでね．　5年10年の長期計画を持っておれば，それに対応して数年かかって住民と対話するとか，専門家の人にもじっくり練ってもらうとか，そういうことが可能なわけですよ．
問題は全部単年度で片付けていくところにあるわけなんです．　武蔵野で市民施設のプロジェクトチームを市民参加でつくろうというのはまさにそういうことなんで，今年は出張所の予算がついたといって小さなのをつくる．　ちびっ子広場の予算がついたといっちゃつくっちゃうわけです．　しかしこれが5年，10年の計画ですと，すこし土地を広く先買いしておいて，遊び場と区役所と一緒につくれると．　そして公民館も，基礎さえ5階建にできるようにつくっておけば，あとつぎ足しもできるわけですね．そうすると一種のコミュニティセンターになる．そういう発想を全然してないんですね．

大高――自治体の金は限られているから，多分この仕事は8年後になるかもしれないということを市民に知らせてそれまでどうしたらいいか楽しんでいてくれ，というような行政ができるといいと思うんですね．

栄久庵――プランナーというのは非常に待望されているし，必要だと思うんですけれども，プランナー自身の性格の相貌ということもあるんじゃないですか．　お札には聖徳太子と夢殿かなんかある．　あの夢殿の中には，いろいろと変遷があったんでしょうけどいろんな地獄の絵が描いてあるんですね．　つまり情報全部を壁にめぐらせて，この中で太子は困りはてていたわけです．　お札の絵ですとね，シューッとして悟りきっているが，人にみられないところでは太子も人間ですから寝っころがって，あるいは悶えていたんだと思うんです．（笑）　それで夢殿なんてみごとな名前は，市民がつけたと思うんですよ．
プランナー自身が夢殿に入る，その中で苦しむだけ苦しむ場所がいる．　聖徳太子は非常にプランナーであり，プロデューサーであり，すぐれた人で，おそらくずいぶんひどいけんかもあったと思うんですよ．　それを悟った相貌にまで自分をもっていって対決する．　そのような人間苦が，問題が大きいほど必要だと思うんです．

松下――古代国家形成期のたいへんな混乱期ですからね，あの段階は．

栄久庵――それを，困ったあと言って夢殿で苦悶してひとつの言葉を発見したのですね．
<和をもって尊しとなす>と．　苦情などを一ぺんに10人まで聞いて10人一ぺんにパッと回答しちゃったというのは10の難問をひとつにコンセントレートさせることができるということで，これが断ずるものの風格ですね．　そのような非常に風格の高い作法があるんじゃないかという気がしてくる．　和というのは作法でそれで断がつながる．　そうするとこんど市民一般の

本牧市民公園（写真提供／横浜市）

ほうからの苦情，要望もそこに人間とのつながりが見出して，プランナーならプランナーとしてはっきり人間としてつながってゆけば，それをあがめるというと変ですけど，尊敬しなきゃいけないという気持が，求める側に働いてくる．ですから，私はいつも思うんですけど，プロデューサーは，聖徳太子がお札にのっかっているくらいに偉くみえなくてはいけない．　そうなれば，要求をつきつける方も，つきつけるだけ責任を負う気持になる．　そうして，はじめてプランナーの仕事は成り立つわけです．　頼られていないプランナーは成り立たない．

田村――プランナーがお札に縁があるとは思わなかった．（笑）　金がないんじゃないかと思ったけど．

大高――英雄時代は一方では開拓すれば人のためになったという時代だけど，いまは開拓すると8割がた人のためにならんかも知れんという時代だから，プランナーというのは聖徳太子よりも偉くないとつとまらないかも知れないね．

栄久庵――そうそう．

編集――最後に，先程，松下さんのほうから大学のカリキュラムの問題が出たんですけど，自治体が要求するプランナーというものの条件，それと大学のカリキュラムとの問題で何か発言があったら…….

松下――大学の学部編成が最もセクショナリズムなんです．　都市工学関係もどんどん増やしてほしいんですがむしろ問題は法学部教育だと思うんです．　いわゆる法学部の課題は法律解釈による一種の統治技術修練で，これをつくり変えなくちゃならない．　法学部の地盤沈下はもう始まっているわけです．　法科万能ではなくなってきた．　たとえば戦争中の総動員計画には法学部出身は役に立たなかったんですよ．理科系出身が主流で経企庁になる．　それに最近は近経出身なんです．　変えるという場合重要なのは，立法論の教育を拡大することです．今後自治体の条例制定権すなわち立法権が拡大されなければならないが，その技術を私たち市民はもっていない．　現状では立法論は素人論といってケイベツされている実状ですが，これはかえって立法技術を中央官僚に独占させることになっている．　だから市民の立法技術の教育が重要になります．

田村――ぼくは今で言えば都市工学科になっているであろうところの建築学科と，それからいま松下さんの言われた法学部と，両方経験しましたんでね．　両方の利点，欠点がよくわかるんですけれども，確かに法律が万能で，法学部が強かったというのはあるいは後進国型ですよね．　それで今でも，実態的なものは多少確かに食われているんだけれども，隠然としてあるというところは日本の後進性の一つの象徴になっていると思うんでせが，法学部のほうはさておいて，都市工学のほうなんですけれども，ぼくは今の都市工学がいいかどうかというのは疑問でね，ああいう格好ではたして期待できるようなプランナーになるのかというと，初めからああいうツボに入れすぎちゃった．　ですから，入れるんであれば都市工学なんていうよりも，環境についての一般教養的な面のコースがいいと思うんです．

そうすると，ぼくは何が不足しているのかと考えるんですけれども，むしろあり過ぎるところが不足しているのかなあという感じがするんです．　つまり，何でももうおまえたちはあるんだということを初めから教え過ぎているんじゃないかということが一つ．　それからもう一つは，そのくせ意外に実践的なことがない．　たとえば都市工学のカリキュラムの中に，ぼくは金の計算を教えろということを言ったんですよ．世の中でお金がどう流れているのか知らないで物をつくるなんていうことはあり得ないんだから，金を教えろと．　もし教えるとするといわゆる地方財政論とかいうことになってしまうんだけれども，生に都市を動かしていくというのは金の原理でしょう．　ぼくはズバリそのぐらいの生のやつが入ってきてもいいんじゃないかなという感じが一つはするんです．

それからもう一言えるのは，さっきも言ったやはり似而非なるやつですよね．　計画というものはこんなものなんだというところに一つでき過ぎている．　ぼくは都市工学の若い学生なんかに言うんだけれども，ぼくは内職型だということを言ってるんですよ．　つまり都市工学なりプランニングというのは，内職的な，何でも一応わかっていて便利屋みたいなものだけになっている．　プランニングは下請屋や内職屋でなく，本職のプロにならなければならない．

また，そういう教育が必要なんです．　じゃ，それではどうやるかというところは問題なんですけどね．　そうするとぼくは大学課程じゃちょっと無理なんじゃないか．　プランナーというのはやっぱりかなり年寄の技術なんじゃないかという感じもするんですよ．

松下——そう．　やっぱり生活してみなくちゃいかんわけよ．

田村——だから，一応生活してね．　ぼくはだから大学院のときにそれを言ったんだけど，大学院というのは，大学院大学なんていう構想もあったけれども，むしろぼくは大学というのは今の大学で全部切っちゃう．　大学院というのは，たとえば大学を卒業してから何年間たたないと入学資格がないとか．　大学院大学だけが出てくればそれは同じですよ．　だから，特にその都市工学みたいなやつは一ぺんそういうめしを食って，それでなおかつやろうという人間が，齢(よわい)30にしてまたまた一ぺんやってみるとかね，そういう種類のやつなんじゃないか．

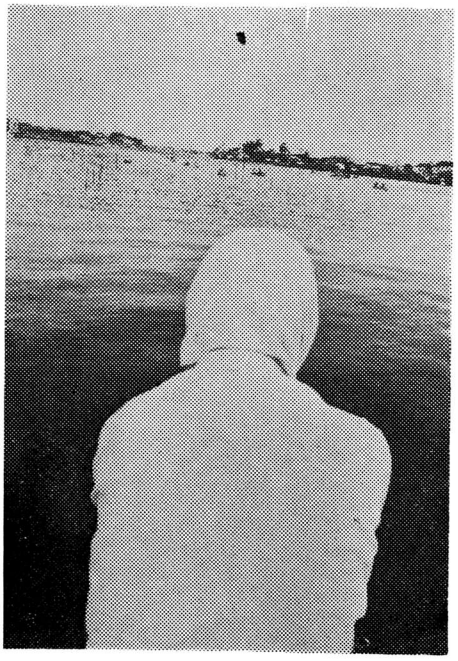
大高——同感だな．　ぼくのところにも都市工を出たのが来たことあるんですがね，生活感がないと言いますか，研究室的な一つの型をつくっちゃっているんですね．

田村——研究室派になっているんですよ．(笑) だけども，これで下手に固まらないので今の都市工学みたいなもので，10年では今の世の中はちょっと足らないかも知れないけれども，15年ぐらい本気で頑張っていられるのがいて実践の中で身につけてゆけば，すごい大物が出るんじゃないかという感じもするんです．

大高——鈍重でねばってまとめるというのが割に少ないんですね．

田村——しかしやっぱりすごいのも出てくるんじゃないかと思うけど，それは別に教育がよかったから出てくるんじゃないかもしれない．

松下——それから，育っても，実際に仕事をやってほしいのは自治体でやってほしいわけですよね．　民間企業よりも．　しかし自治体の体質が変わらないと受け入れ体制がないということですね．　ここでくさってしまうという問題がどうしても残ります．



栄久庵——その点では，民間企業は無口外の経営体制なんだから．　こんどもうちに凸版印刷から2人ほど来ているんです．　つまり，向こうで長い歴史があるもんですから多少もう固まっていると．　それを放り出すことによっていい効果が得られるということを重役たちは考えているわけですね．　それで出すと，影響を与えるだけのレシーバーを持って帰ってくる．それ非常に重要な感覚ですね．

松下——やっぱり権限とお金と自治体に渡さなければね．　渡せば自治体も一体どうしようかと本気で考えだすわけですよ．　むしろ今の自治体は権限もお金もないから安心してねむっていられる面もあって，三割自治が四割になったら今の体質の自治体ではかえって困るのではないか．

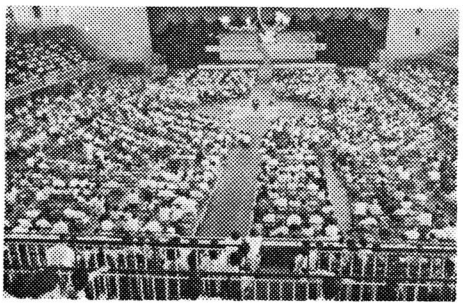
編集——そういう自治体のプランナーを受け入れる体制をつくり出す，権限と金を下のほうへ委譲していくという，そういう突破口というのはどういうところにあるんですかね．　一般に住民運動として…….

松下——住民運動だけではなく，それを背景として，先程田村さんが，区の建築の実物教育を言われましたけど，日本の自治体で一つでも二つでもいいからいい実績を上げて見せることですよ．　そうしますと自治体がしっかりしておれば波及効果が広がっていきますよ．

大高——だから私，宇部の場合社会のきれいな面だけじゃなしに，たとえば精薄児がいますね，精薄児を職員に使っているんですね．　非常にしっかりしたいい仕事をしますね．　そういうところまですくい上げた実際の仕事，それもご婦人なんですが，そういうご婦人の運動とからめてやってきたところはなかなかみごとだと思います．　飛鳥田さんもそういうところがあるようにちょっと聞いてますけれども，何か首長のあり方みたいなものが，何かおっかない市長室に坐るというんじゃないあたりに，一つの道があるような気がするわけです．

田村——やっぱり住民が変わってくるんだし，何といっても首長ですよね．　首長はとにかく選挙ですからね．　だからほかの役人が今まで積み上げたものと全然別な行動を，首長だけは自治体として少なくともできる．　そのへんがさっき首長を中心としてそのスタッフのプランナーを持つべきだという松下さんの話につながってくると思うんだけど，今の制度の中ではやはり何といってもそのへんが突破口ですよ．

編集——それじゃこのへんで終わりたいと思います．　どうもありがとうございました．



一万人集会